第11回

ますみが行く!!

記者の方々を通じて、私たちは様々なニュースを知るわけですが…そういう意味においては新聞やテレビのマスコミは、ある意味知何様にでも世間を牽引する力があるわけですよね…ここ数年政府のニュースを届ける役目のある記者クラブなどに対してももっとオープンであるべき、記者を分け隔てなく現うべき、各社の独自路線でなく記者みんなでの記事合わせは変だろう…などが話題になっております。そんなマスコミを皆さんどう思って見ているのでしょうか？　与えられたニュースは全て鵜呑みにしてしまうのか、そこから自分でちゃんと判断するのか…難しいところであります。

そんな中で、時にもっと厳しくも的確に発信してほしいなぁなんて思うことも。そう思う昨今、長崎をまたかき回しに戻ってきた記者がいる…との情報を得て、ならば、いざ逆取材であります!!

さて、何者かしらん？

11年ぶりに長崎で暮れるとの噂の方…あら、お会いすると、眼鏡をかけた優しそうなお兄様風ではありませんか？…もっと怖い記者の方を想像していたけど…この笑顔が危険、危険（笑）そのお方、毎日新聞社の長崎支局長として赴任なさった「潟永秀一郎氏」。鹿児島出身の49歳、毎日新聞に入社し、筑豊、鹿児島、福岡、東京などで勤務。主に社会部畑で、オウム真理教事件や普賢岳災害などの取材にも関わり、雲仙で長崎との繋がりが出来たんだそうです。

何でも長崎は赴任先として全国でも人気が高い地域だそう…地方の中ではニュースも色々あり出稿量が多く、またよそ者を排除しない町の雰囲気や女の人がキレイだとか飲み屋さんがとても親切で良い、などの話が赴任した人を通し語り継がれていて希望者が多いんですって。嬉しいことだ！　そんな中で潟永さんも希望が叶い、96年から長崎で4年間の勤務。普賢岳災害で経験もあることから普賢岳災害復興室の取材から始め、県政記者として高田県政2年、金子県政に2年関わったそうです。その頃の雲仙岳災害復興室は当時の清滝副知事が先頭に立って、議員や時には記者までも部屋に入り浸って職員と侃々諤々の議論を交わしたり、外の声もとても大事にしていたとか。想像以上に公務員って人の声を聞くんだなあということや、徹夜で議事録をまとめ上げ、すぐにその中身を関係団体に送る姿勢など、公務員の働きぶりにも感心したそうです。一体感がある感じで良い時代だなぁ…。その際の人間関係も役に立てつつ、半年かけて各部署の課長や総括補佐をくまなく回り、県政の状況を頭に入れつつ、取材をしつつ…。

「ちょうど参議院選挙などもあったので、来崎して半年で政界、財界の方々に会うことが出来たのも良かったかなぁ」と。色んな繋がりを短期間で得て、潟永さんは県政記者として暮れることになったようですが…。

その頃の長崎県政はどうだったのやら？？？

知事が違えば県政も色々と違いがあるようで、おおらかな人もいれば、細かい人もいるでしょうし、いい意味で職員に任せる方もいれば何でも自分がやるって方もいて、それによって大きくイメージも、環境も違うでしょうね…私はまだ2人目の知事ですし、まだ新知事になっての違いは感じることもないですから、これからを期待なわけです。で、潟永さんが経験したその頃の長崎県はアーバンルネッサンス計画真っ只中の頃。今の水辺の公園にコンベンションセンターやらホテルやら様々な都市計画がなされていて…「不思議な感じでしたね…レールが敷かれた事業って感じで」ん～何か今の焦市跨地のようですが。当時も財政難でとん挫してしまい、今はあのような県民の憩いの場所になったんですよね…。しかし、無理にやってなくて良かった良かったぁ。で、県庁の中はというと知事も変わり…「議会も行政も予定調和な感じだったね、大御所が一杯いたし」確かに当時は諍々たる重鎮が居並んでいた時代なんでしたよね。それで「なるべく夜に行動して、いろんな情報を収集してましたよ、表だけでは面白くないですし」そりゃそうだ、お酒の席の方が本音もポロリ…いい感じで話しやすいですしね、四角四面に取材されてもこちらも答えづらいですから（笑）。「当時と比べると県庁マンも小粒になった感じがしますね、侍がいない。夜の街にも出てないし、もっと外を見るべきでしょ！」確かに…庁内だけにいても街の真の姿は見えて来ないし、声も聞こえてこないですから。それに街も潤わないですからね…県庁の方々、もっと外に出ましょ！　一緒に行きましょ！　誘ってください♥

マスコミの方々には、何が？？？

「もっと跳ねっ返りがいてもいいんじゃないかなぁ。上司はけんか相手だし、役所に記者室がある意味は、もの申す『異分子』の存在だと思う。10聞いて1書く、その『1』を厚くするためには、いろんなアンテナやチャンネルを持ってないと」

なるほどね…長崎を出てからの11年間、潟永さんは事件担当デスクの後、生活報道センターで悪質リフォームや高齢ドライバーの問題などキャンペーン報道を手がけたり、漫画家の西原理恵子さんの担当をしたりと幅広い仕事をしていたからこそ、感じることも多いのかもしれません。10聞いて1を実行…これは議員にも通じることですし、視野も広げなければなりませんし、記者と議員は通じるところ確かに多いんですよね。「記者という仕事を選んだ時点で、ある程度私生活を捨てる覚悟が必要だし、足で稼ぐ努力をしないと。社内に居なくて良いし、記者の醍醐味も一番大事なことも、色んな人に会うこと」これも議員も同じだぁ。「記者は事実の裏をどう捉えて伝えられるか、決まったことを伝えるだけなら記者はいらない。おかしいと思ったら疑問を投げかけ、読者に考える材料を与えなきゃ。それと『書く』ことが書かれた側の人生を左右してしまうこともちゃんと理解してなければいけないと思う」。マスコミの発信はホント怖いですう。

記者魂とは如何に？！

毎日新聞社長崎支局長、潟永秀一郎氏。左が筆者

で、県にもあるでしょうといたいこと

「人に優しい県政って、キャッチフレーズはいいと思うんですよ。かつてはしばしば特定の人や業者にやさしいところがあったから（笑）。ただ、姿が見えない。いまだ国の形は定まらず、あてにならないんだから、NPOとの連携を深めるとか、市民との関わりを大事にして協力を得る仕組みを考えてほしい」。そうですね…声を聞いているつもり、では何にもならないわけですから。

「2人目の副知事も早く決めた方がいいんじゃないかなぁ」。ホントですよね。どうなるんだろ…。「龍馬伝に例えるなら、若い奴を今こそ育てないと。今はあの頃に匹敵する激動の時代だと思う。維新の頃、『盟誓』と言われた藩はみんな、有為な若者を見いだして仕事を任せた。知事は県内も庁内もよく知っているのだから、その発揮役になって未来の礎を作ってほしい」とも。

周りが潟永さんへ言う事は「とにかく、長崎をかき回せ」。まあこれも良いかもしれませんね。予定調和を打ち破って頂くということで、どうぞ元気に暮れくださいまし!!　厳しい視点を期待していますが、お手柔らかに（笑）。

浅田（あさだ） ますみ

小島小、中、長崎南、活水短大卒業。学生時代からラジオ制作、イベント企画の仕事に携わる。07年4月から県議会議員。07年9月号～08年9月号まで「ますみの県庁ぶらぶら」を連載